

NPO 法人日本脳神経血管内治療学会理事長（三重大学医学部脳神経外科）

## 滝 和郎

日本脳神経血管内治療学会の会員数の増加とともに、学会の専門医制度も充実してきた。大変喜ばしいことであり、学会として今まで以上に社会に認知され、またさらに医療を通じて社会に貢献できる学会へ進展することが期待されていた。このことを達成するには学会の法人化が必須であり、数年をかけ準備を行いNPO法人に移行した。法人化とともに目的としていた日本専門医認定制機構への加入、専門医資格の広告の許可をめざした。専門医認定制機構への参加には、満たすべき様々な条件があり、この条件を満たすべく、学会の専門医制度に多くの変更が行われ、ようやく日本専門医認定制機構への加入が認められた。また専門医資格の広告について厚生労働省からの許可は目前である。

この学会のNPO法人化に伴い、1年間に複数回の機関誌の発行が義務付けられた。Interventional Neuroradiologyからの複数回の発行が困難であることで、残念ながらこれまでのInterventional Neuroradiologyを機関誌とすることを中止し、新たに日本語、英語の両方の論文の掲載が可能であるJNETという機関誌として出発することになった。同時に、小宮山雅樹先生を編集長とする新しい雑誌として、改めて誕生することとなった。大変お世話になったInterventional Neuroradiologyの編集長であるMarco Leonardi先生から、なんらかの方法で日本脳神経血管内治療学会との交流を維持していることを明らかにしておきたいということで、Interventional NeuroradiologyにThe journal sponsored by JSNETという言葉はどこかに入れたいという申し出があった。こちらも英文誌にJSNETがいつも出ていることで国際的に名前を知られることは願ってもないことであり、是非こちらもお願ひしたいとご返事をしている。大変お世話いただいたにもかかわらず機関誌を変更するのは心苦しいが、学会が発展するためにやむをえない処置であった。

私事になるが、振り返れば、小生がこの血管内治療の世界に足を踏み入れたのはJ NeurosurgeryのFedor Serbinenko先生（1974年）のバルンカテーテルの脳血管障害への応用についての論文<sup>1)</sup>に興味を持ったからである。小生には極めてインパクトの強い論文であった。残念ながらこの論文には方法などの記載がなく不完全な論文であるが、いかに論文が自分にインパクトを与えるかということをもっと感じたものである。

さて、この機関誌JNETにこれから掲載される論文や記事を読み、多くの医師が血管内治療に興味を持ち、知識を深め、ますます血管内治療が進むことを心から願うものである。

また多くの方々から御投稿をいただき、より学術的に価値も高く、実際の血管内治療に役立つような雑誌に育てていただけるように期待している。

## 文 献

- 1) Serbinenko FA: Balloon catheterization and occlusion of major cerebral vessels. J Neurosurg 41:125-145, 1974.

## 小宮山雅樹

古い原著を読むのが私は好きです。著者の考えが時代を超えて、伝わって来る気がします。最近、診察した Sturge-Weber syndrome の子供さんについて調べる過程で、London の Royal Free Hospital の神経内科医 William Allen Sturge (1850-1919) の書いた 6 歳児の症例報告<sup>1)</sup> を読みました。彼がこの論文を書いたのが 1879 年の 29 歳の時であり、今でも簡単に原著が手に入ります。当時、てんかんを勉強していた Sturge 青年とこの論文を通して会話できるような気がするのも、彼が残した症例報告のおかげです。このように、あとで reference される論文を書くのが無類の喜びです。

私のはじめて書いた論文が、大学を卒業して 8 年目の今からちょうど 20 年前のことです。当時、MR 機器が日本にも導入された時期で何か発表をしたいと思いました。Harvard の院生であった Raymond Vahan Damadian が 1971 年に Science に書いた T1 と T2 緩和時間を測定すれば癌が分かるという有名な論文<sup>2)</sup> があり、それに対する脳腫瘍での negative data の論文でしたが、当時の American Journal of Neuroradiology の editor に手伝ってもらいながら airmail でのやり取りで、revision を繰り返したのを今でも覚えています<sup>3)</sup>。初代の JNET の編集長としてそのような役割をも果たせれば、せめてもの恩返しかと考えております。

Internet 時代になり、communication の手段も変わり、日本と外国との距離を感じない時代になりました。日本では新しい device や塞栓物質が早期に使えない等、諸外国に比べて遅れており、そのことがことさら強調されてきました。それも事実ですが、硬膜動静脈瘻の pin-point occlusion、動脈瘤塞栓術の dual catheter technique、完全閉塞脳動脈の慢性期再開通などに代表される日本発信の情報も数多くあるように思います。

日本の脳血管内治療の forum 的役割と日本から世界に向けての情報発信の礎として JNET を皆様と一緒に育てていければと思います。JNET を良くするも、悪くするも、皆様の JNET への情熱、つまり投稿論文にかかっています。駆け出しの機関誌ですが、皆様とともにその役割を果たせるように努力したいと思います。

### 文 献

- 1) Sturge WA: A case of partial epilepsy, apparently due to a lesion of one of the vasomotor centres of the brain. Trans Clin Soc Lond 12:162-167, 1879.
- 2) Damadian RV: Tumor detection by nuclear magnetic resonance. Science 171:1151-1153, 1971.
- 3) Komiyama M, et al: MR imaging: Possibility of tissue characterization of brain tumors using T1 and T2 values. AJNR 8:65-70, 1987.

## JNET 編集委員・査読委員

### ■編集委員

小宮山雅樹：大阪市立総合医療センター 脳神経外科（委員長）

中原 一郎：社会保険小倉記念病院 脳神経外科（副委員長）

佐藤 浩一：徳島赤十字病院 脳神経外科

滝 和郎：三重大学 脳神経外科

寺田 友昭：和歌山労災病院 脳神経外科

桑山 直也：富山大学 脳神経外科

坂井 信幸：神戸市立医療センター中央市民病院 脳神経外科

宮地 茂：名古屋大学 脳神経外科

吉村 紳一：岐阜大学 脳神経外科

清末 一路：大分大学 放射線科

### ●査読委員

高橋 明：東北大学大学院 神経病態制御学分野

根本 繁：自治医科大学 脳神経血管内治療部

瓢子 敏夫：中村記念病院 脳血管内外科

兵頭 明夫：琉球大学 脳神経外科

安陪 等思：久留米大学 放射線科

伊藤 靖：新潟大学脳研究所 脳神経外科

江面 正幸：東北大学大学院 神経病態制御学分野

小林 繁樹：千葉県救急医療センター 脳神経外科

杉生 憲志：岡山大学 脳神経外科

長島 久：慈泉会相澤病院 脳血管内治療センター

中村 貢：姫路循環器センター 脳神経外科

廣畑 優：久留米大学 脳神経外科

松丸 祐司：虎の門病院 脳神経血管内治療科

村尾 健一：城山病院 脳血管内治療科

村山 雄一：東京慈恵会医科大学 脳神経外科